

ひかり

一般社団法人

光陽福祉会

発行日 平成 26年11月 第52号

今後の福祉はどうなるの？

会長 菊池 利哉

福祉の陰には魔物が潜む。その魔物に触れないでおいた方が悩まなくて済む。しかし、その魔物を知らないわけにはいかない。そんな訳で今回は魔物に触れてみることにした。最後に魔物対応策をご紹介しますので・・・

読むのも嫌になるが、措置→支援費制度→障害者自立支援法→児童福祉法・障害者の生活を総合的に支援する法律(通称:総合支援法)。

この10年でどれだけ法改正があったか？

しかし、障害のある子どもを抱える父親としてはこんな素晴らしいことはない。平成15年以前は今のような放課後等ディサービスはなかったし、平成15年～平成18年までは小学生のみ対象のディサービスだった。また、作業所や授産所は無くなり、A型・移行支援・B型・生活介護全ての障害福祉サービスに「社会と子どもたちを繋ぐこと」が明確化され、昔のような困り込み福祉なんて考え(一生同じところに通い続けなければならない)は消え去っているはず。

そういう意味では、現行の法制度。これからの法制度はきっと子どもたちにとって良くなるはず。しかし、一方で魔物が住んでいるのも福祉だ。国が意図して誤魔化しているのか？それとも我々の勉強不足なのか？その辺りは解らないが魔物がいることは事実なのです。

その魔物は、「第二種福祉事業」。

聞きなれない言葉ですが、福祉には第一種福祉事業と第二種福祉事業の2種類の事業があります。簡単に言うと外郭団体や社会福祉法人のみが行なえるのが第一種福祉事業。株式会社も合資会社もNPO法人もどんな法人でも行える事業を第二種福祉事業と言います。

この法改正の間、障害福祉サービスの多くが第二種福祉事業になった。例えば、作業所や授産所は旧法 第一種福祉事業だったが、現法ではA型・移行・B型・生活介護は第二種福祉事業だ。では、どこに魔物が住んでいるのか？まず一つは、「福祉サービスを増やしてほしい」と何処に頼みに行くか？である。第一種福祉事業であれば行政だったが、これからは、民間企業に直談判となる。言い換えると要望する場所がないのだ。魔物だけに姿を消しているのだろう。

そして、誰でも参入できる福祉事業は専門性の持たない所も多い。この魔物は怖い。さらに、福祉従事者の不足は深刻な課題である。つまり、将来の我が子のことを考えるとグループホームが必要だと思っても、行政は話を聞くだけ、だからと言ってどこかの企業に頼んでも専門性と人材不足、採算性の悪さから断られてしまう。という事態が起きている。

以上の魔物対策のためには何をしなければいけないのか？答えは2つしかないと思う。一つは、個人で行動することは極めて困難。保護者に属し、多くの保護者と共に要望すること(クレームではなく要望)もう一つは、法制度等について学習することが必要だろうと考える。光陽福祉会には保護者会があります。今一度、保護者会の存在意義を確認頂きこれからの子どもたちの将来を共に考えて行きましょう。

きっずサポートはぐくみ

基本と応用

大島 由美子

いろいろな事において基本と応用があるように、はぐくみでの生活・療育内容のベースにも基本（定番のもの）と応用（少しの変化やプラスの要素を付け加えた物=+α）があります。

例えば 《遊びの時間》

朝の来所後の時間は緊張をやわらげリラックスできるように、お弁当を食べた後の時間は楽しみの時間として、一日の流れの中に組み込まれている「自由遊びの時間」。遊び方、個人の楽しみ方は三者三様。そして遊びの中にもいろいろな成長過程・段階があります。

- ①大人と一緒にいろいろな物に触れ、興味・関心を持つ
- ②一人遊びを楽しむ
- ③友達と同じ空間で個々に同じ種類の遊びを楽しむ(平行遊び)
- ④玩具の共有や貸し借りをして遊びを楽しむ
- ⑤ごっこ遊び(玩具の共有・役割・分担)を楽しむ

もぐるの大好き3人組



小麦粉おんどでピザ作り



はぐくみの子ども達を見ているとこのような段階を踏まえて進んで行っているように感じられます(現時点は主に①~③です(〇))。このように遊びの場面だけをとっても個人の幅がとっても広い。

三者三様の遊びの時間において、ここでいう基本(定番)というのは、いつも必ずある「遊びの時間」そのものの事。その中で好きな遊びを楽しんでもらうという事。そして応用というのは、遊びの中での個人の成長段階に合わせて「それぞれの段階に必要なルール・マナーを知る、身につけていく」という事。

何でも口の中に物を入れてしまう子、投げつけてしまう子に対しては「危ない!」という事が認識できるように。玩具の取り合いになった場合は順番で遊ぶ・貸し借りの方法で譲り合う事ができるように。

応用部分=個人の現在体当たりでぶつかっている課題の部分ということになります。

・・・そう思うと遊びの場の重要さを実感してしまいますね。

《昼食・おやつ作り》

ここでの基本のテーマは「五感刺激」
それをもとに①手洗い②待つ姿勢・順番③季節の食材にふれる④何か一つ道具を使う…をサブのテーマとして進めています。そしてここでいう応用とは「メニューのバリエーション」

etc...同じ粉もの、似たような過程を踏まえるけれど、うどん・ピザ・クッキー
というように出来上がりの形が違うもの。食の広がり、楽しみを感じる事ができるように、いつも“わくわく”を心掛けています(^_^)

ピザを作ったよ!

こねこねギョッギョ



どーしよ!ピーマン入れました (-_-)



いっぱいおせて...

やっど唇く番!バクッ





サポートセンターつぼみ



スマイルがいいね

東垂水 豊子

木々も色づき始め、さわやかな季節から肌寒い日々へと移っていく11月。冷たい風もへっちゃらな子ども達と、この季節を謳歌していきたいと思います。今回は小学部の子ども達のつぶやきやことばを拾い集めてみました。

「白髪 見る。」

隠しているつもりでしたが、職員の前髪を上げて光る白髪を見つけ、ニコッと笑顔です。

「僕のがね(フレーム)が硬いのはね、片栗粉を入れて作ってあるからなんだよ。」
そうか、片栗粉はとろみをつけるだけでなく、硬くしていく事も出来るんだね。

「つぼみのお茶は紅茶の味だね。」
残念。正解は麦茶です。

「4年生が終わったら5年生。」
進級が待ち遠しいんですね。

「先生の顔、嫌い。何とかしてよ。」
ごめんなさい。可愛らしくなりたかったんだけど、生まれた時からこの顔なんです。

「チョコレートは明治。」

ロングランCMソングも登場。夏休み中は“ありの～♪ままの～♪”一色でしたが、最近は妖怪ウォッチも人気です。もちろん振り付け有りです。

「アッハッハッハッハー。」

小さい体ですが、豪快な笑い声を響かせてくれます。

「じいじとばあちゃん。」

おばあちゃんばあちゃん、おじいちゃんは何故かじいじさんなんですね。

「やらない。」「いやだ。」「やなこった。」

職員を困り顔にすること大好き。

食べかけのおやつを職員の口の前に出し「どうぞ。」ありがとう。

誰もが今伝えたいことを、ことばで表情で身振り手振りで一生懸命発信してくれます。職員がその心をすみやかにくみとれない時など、思わず小さなパンチが飛んでくることもあります。皆の素直でストレートな気持ちを正しく理解し、お互いの絆を少しずつ強めていきたいと思っています。

子ども達同士の会話の中に職員の口癖がそのまま出てきて、ハッとすることもあります。私共も気付かされ、皆と一緒に成長できればと願っています。子ども達のことばやしぐさに一喜一憂し、元気をもらっています。そして、ひとりひとりの笑顔が心にしみてきます。



第2光陽

『こねる』

杉山 洋子

最近のつぼみは、小麦粉に縁があるなあ、と感じています。
パンの移動販売「ハッピーパンさくらさん」や、パン作り体験のパン屋FIORIさん・・・
そして、中高生の調理。

9月・10月のテーマは、『こねる』でした。
『こねる』を辞書でひくと、“粉や土などに
水を混ぜて練る”と出ていました。
つぼみでもピザ生地や、ギョーザの皮を手
作りしましたが、こねこねして指先の感
覚を楽しんだり、形を自由に変化させ、思っ
たものを作り上げたりと、取り組む子どもた
ちも嬉しそうです。



さらさらした粉に水が加わることによって、
次第に固体になってゆく・・・それを不思議そうにじい〜っと見ている子。
まとまるまでのベチョベチョしたのが嫌で、すぐふきとろうとする子や、待ちきれずに、こねている生地を
つまみ、口にポイツとしようとする子(笑)

反応はいろいろです。

柔らかい生地はとても心地良いのか、中にはずっとさわりたいがっついていたり、愛しそうに丁寧に
そっと持ち上げたり、例えるならば、とても小さくて可愛い小動物に接している様な感じがして
見ている方もとても微笑ましく、同時にヒーリング効果もあるように思えました。

粘土遊びが想像力や自発性を培う事は広く知られています。

ピザ・クッキー・パン・ギョーザ等の調理をすることで、粉の感触を楽しみながら形作る他に、
材料を混ぜたり、具材をのせたり、包んだりすることによって、色や匂い、焼いたりした後の変化も
感じることができます。

そして何より調理だと自分の作ったものを食べることができますよね。

つぼみのみんな、機会があれば家でもこねこね調理してみてくださいな。

でも、もう1つの『こねる』の意味・・・“相手が困るような無理な事をあれこれ言ったり行う”
だけはくれぐれも少なくしてね。

ごきげんよう さようなら。



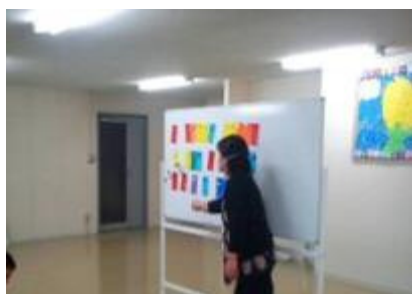
第2サポートセンターつぼみ



ハンドベル・ゴスペルで楽しく表現しよう

原花織

第2サポートセンターつぼみでは、これまで表現訓練として3B体操を行ってきましたが、それに加えて9月から新しい活動として、ハンドベルとゴスペルを取り入れています。



ハンドベルでは、自分の役割を理解・確認すること、協調性を育み、連帯感・達成感を味わうことがねらいです。ハンドベルは「ドは赤」のように1音ずつ色が違うものを使っています。ハンドベルと同じ色の折り紙を短冊形に切り、曲に合わせて鳴らす順番に並べてホワイトボードに貼ります。折り紙を順番に折っていきながら、自分のハンドベルと折り紙の色をマッチングさせて鳴らします。始めは促されて鳴らしていた子たちも何度か活動を重ねるうちに、ホワイトボードを意識できるようになり、真剣な表情で先生の指示棒の動きを追っています。みんなの音がつながり、「きらきら星」や「どんぐりころころ」などの曲が演奏できると、自然に子どもたちからも拍手が起こります。テンポに合わせてタイミングよく音を鳴らすことや姿勢、集中力を高めることもこれからの課題にしていきたいです。



ゴスペルは、声を出すことで脳に刺激を与えること、自分を表現する方法を知ることがねらいです。音の強弱や力加減、動作を意識することを学び、表現することの楽しさを味わってほしいと考えています。まずは体をリラックスさせるために体を動かし、手拍子などをしながら歌に入っていきます。始めは恥ずかしさもあるのか、なかなか声が出ませんでした。体を動かすことで少し緊張もほぐれたようです。「マ」だけで歌ったり、1フレーズを繰り返すなど歌いやすいフレーズにしており、子どもたちも一生懸命歌おうと先生の口の動きを見たり発音を聞き真似しようとしています。活動を重ねることで歌うことや雰囲気慣れていき、声を出して表現すること、歌うことの楽しさを感じてもらいたいと思います。

どちらもまだ始まったばかりですが、子どもたちの状況や課題に合わせ、声や楽器を使って楽しみながら表現方法を学んでいけるよう活動を行っていききたいと思います。

